

X 大坂城跡の竈跡について

合田幸美

はじめに

今回の庁舎周辺整備事業に伴う大坂城跡の調査で検出された竈遺構は、表4-X-1に示したとおり83基を数え、その年代は豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前（豊臣前期）～徳川氏による大坂城再築後（江戸～近代）に及ぶ。年代別の竈遺構数は、豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前（豊臣前期）が72基、三の丸築造以降、大坂夏の陣直前（豊臣後期）が5基、大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前（畑の時期）が4基、徳川氏による大坂城再築後（近代）が2基であり、ほとんどが豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前（豊臣前期）に属する。

本稿は、これら竈遺構のうち残存状態の良好なものを取り上げ、今回の調査で様相が明らかになった豊臣前期を中心とする近代までの竈を整理し、紹介することを主眼とした。そのため、竈遺構の図、記述については本文と重複する部分があるが、ご容赦願いたい。

また、周辺の大坂城調査において検出された竈を概観し、今回の調査で検出された竈遺構との比較検討を試みた。次いで、中世～近世竈の雑駁な集成から中世～近世竈における大坂城の竈の位置づけを考えてみた。

1. 竈遺構の整理

豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前（豊臣前期）の竈遺構

豊臣前期の竈遺構72基のうち、17基について概観する。遺構は検出状況などからつぎの6項目に分けて見てみたい。

屋敷に伴う竈（図4-X-1）

遺構番号1A調査区竈4（遺構番号886）（以降、調査区、遺構番号は略し1A竈4（886）のように記述する。）、3A竈3（1069）がある。

1A竈4（886）は、屋敷5に伴う竈である。屋敷5は、東西6m、南北4mの範囲で盛土によって平坦面が形成される。竈は屋敷5の中央よりやや東側に位置し、焚口は西側へ向く。竈は土製で、平面形は円形であり、直径75～95cm、燃焼部径40cmである。焚口側は竈の設置面よりやや低く、焚口前面には瓦片が敷かれる。瓦片は焚口前面から約2m伸びる。竈から遺物は出土していない。竈の南側は横板が立てられていたようであり、材の一部が残存する。竈の背面となる東側では竹材が平行して検出され、垣根の可能性が考えられている。屋敷5とした平坦面には礎石は認められず、上屋の有無は不明である。

屋敷5の西側には、屋敷5と同じく盛土によって平坦面が形成される屋敷4が北面をそろえて隣接する。屋敷5と屋敷4の間には井戸13があることから、これら遺構周辺が台所として機能していた可能性が考えられる。屋敷5の南東側には、南北軸の礎石立ち建物である屋敷6があり、屋敷5の盛土は、その南東隅部から東へ通路状（長さ2m、幅50cm）に屋敷6に向かって伸びていることから、屋敷5、屋敷4、井戸13からなる台所は屋敷6に付随する可能性が考えられる。

3A竈3（1069）、3A竈6（1072）、3A竈7（1073）は屋敷2に伴う竈である。屋敷2は、南北軸の礎石立ち建物を中心とする東西24m、南北11mの範囲であり、礎石立ち建物の北側には溝36が東西方

表4-X-1 竈遺構一覧

番号	調査区	遺構	時期	遺物	焚口の方向	大きさ	掲載
883	1A	竈2	豊臣前期		北		掲載
884	1A	竈1	豊臣前期		北		掲載
885	1A	竈3	豊臣前期		北西		掲載
886	1A	竈4	豊臣前期		西		掲載
931	3A	瓦敷竈	豊臣前期				
1068	3A	竈2	豊臣前期	漆器椀、箸、膳の板、釘、小柄、小刀	南東		掲載
1069	3A	竈3	豊臣前期	瀬戸・美濃灰釉皿、漆器椀、下駄	東		掲載
1070	3A	竈4	豊臣前期				
1071	3A	竈5	豊臣前期				
1072	3A	竈6	豊臣前期	染付、瀬戸・美濃天目碗、白磁皿、土師器皿、甕	北		掲載
1073	3A	竈7	豊臣前期		東、西		掲載
1074	3A	竈8	豊臣前期		北	直径30cm	掲載
1075	3A	竈9	豊臣前期		北	直径30cm	掲載
1076	3A	竈10	豊臣前期		南	直径30cm	
1077	3A	竈11	豊臣前期				
1078	3A	竈12	豊臣前期		西?		
1079	3A	竈13	豊臣前期				
1080.1	3A	竈14	豊臣前期		東		掲載
1080.2	3A	竈14	豊臣前期		西	直径30cm	掲載
1081	3A	竈15	豊臣前期		北	直径30cm	掲載
1082	3A	竈16	豊臣前期			直径30cm	掲載
1083	3A	竈17	豊臣前期		南	直径30cm	掲載
1084	3A	竈18	豊臣前期		東	直径30cm	
1085	3A	竈19	豊臣前期		西	直径30cm	
1086	3A	竈20	豊臣前期	金箔瓦、スラグ	北	直径30cm	掲載
1087	3A	竈21	豊臣前期		北	直径30cm	掲載
1088	3A	竈28	豊臣前期				
1089	3A	竈29	豊臣前期				
1090	3A	竈30	豊臣前期				
1091	3A	竈31	豊臣前期				
1092	3A	竈32	豊臣前期				
1093	3A	竈33	豊臣前期				
1094	3A	竈34	豊臣前期				
1095	3A	竈35	豊臣前期				
1096	3A	竈36	豊臣前期		西		
1097	3A	竈37	豊臣前期				
1098	3A	竈38	豊臣前期				
1099	3A	竈39	豊臣前期				
1100	3A	竈40	豊臣前期				
1101	3A	竈41	豊臣前期				
1102	3A	竈42	豊臣前期				
1103	3A	竈43	豊臣前期				
1104	3A	竈44	豊臣前期				
1105	3A	竈45	豊臣前期				
1106	3A	竈46	豊臣前期				
1107	3A	竈47	豊臣前期				
1108	3A	竈48	豊臣前期				
1109	3A	竈49	豊臣前期				
1110	3A	竈50	豊臣前期				
1111	3A	竈51	豊臣前期				
1112	3A	竈52	豊臣前期				
1113	3A	竈53	豊臣前期				
1114	3A	竈54	豊臣前期				
1115	3A	竈55	豊臣前期				

1116	3A	竈56	豊臣前期				
1117	3A	竈57	豊臣前期				
1118	3A	竈58	豊臣前期				
1119	3A	竈59	豊臣前期				
1120	3A	竈60	豊臣前期				
1121	3A	竈61	豊臣前期				
1122	3A	竈62	豊臣前期				
1123	3A	竈63	豊臣前期				
1200	3B	竈1	豊臣前期				
1201	3B	竈2	豊臣前期				
1202	3B	竈3	豊臣前期				
1203	3B	竈4	豊臣前期				
1319	5B	竈2	豊臣前期				
1320	5B	竈3	豊臣前期	銭、石、焼土。周辺で貝、木。			
1333	6A	竈1	豊臣前期	焼土			
1334	6A	竈2	豊臣前期				
1335	6A	竈4	豊臣前期				
1336	6A	竈5	豊臣前期				
664	3A	竈1	豊臣後期	塩壺、瀬戸・美濃志野			
665	3A	竈27	豊臣後期		南？		掲載
752	5B	竈	豊臣後期				
753	5B	竈1	豊臣後期	周辺で銭			
849	6A	竈3	豊臣後期				
475	3A	竈22	畑		南		掲載
476	3A	竈23	畑		南	直径50cm	掲載
477	3A	竈25	畑	周辺で焼塩壺、羽子板	東		掲載
478	3A	竈26	畑		東		掲載
65	6A	炉1（竈3）	近代		北		掲載
66	6A	炉2（竈4）	近代		北		掲載

向にはしる。

3 A 竈 3（1069）は礎石立ち建物の南西隅部に近接し、焚口は東側へ向く。竈は土製で、平面形はC字形であり、幅1.5m、奥行き1m、燃焼部径50cmである。焚口には直径50～60cmの浅いくぼみがある。竈からは下駄、瀬戸・美濃灰釉皿、漆器碗が出土する。礎石立ち建物の礎石は竈の北側までであり、竈周辺には規則的に並ばないことから、竈は建物内に配されるというよりも、軒先のような建物の端に位置したと考えられる。

3 A 竈 6（1072）、3 A 竈 7（1073）は礎石立ち建物の東に位置する。礎石立ち建物から、3 A 竈 6（1072）は約7m、3 A 竈 7（1073）は約6m離れた地点にある。

3 A 竈 6（1072）は3連で、焚口は北側へ向く。竈は土製で、平面形は各々C字形である。袖部を共用し、共用する袖部には平瓦を入れて補強材とする。全体の幅1.2m、奥行き50cm、燃焼部径20～30cmで、各々小型の竈である。西端部の竈がやや大きく、その西袖部および背面にはそれぞれ2枚の平瓦が入れられ比較的堅固に補強される。竈からは染付、瀬戸・美濃天目碗、白磁皿、土師器皿、歯などまとまった遺物が出土する。

3 A 竈 7（1073）は南端が矢板で区切られ全体の様相は不明である。背面を共用する竈で、東側に5連、西側に2連の竈があり、焚口は東西両側へ向く。竈は土製で、平面形は各々C字形である。全体の幅2m、奥行きはそれぞれ50cmで計1m、燃焼部径20～30cmである。両側とも南端部の竈がやや大きく、東側南端部の竈は焚口をやや北東へ向ける。



図4-X-1 豊臣前期 屋敷に伴う竈

等間隔で並ぶ竈 (図4-X-2)

3 A 竈 8 (1074)、3 A 竈 9 (1075)、3 A 竈 20 (1086)、3 A 竈 21 (1087) の 4 カ所計 5 基 (3 A 竈 8 (1074) は 2 基) の竈が等間隔で検出されている。

東西方向の溝37の北側で、先述の竈 4 カ所計 5 基 (3 A 竈 8 (1074) は 2 基) が約 5 m 間隔でほぼ東西方向に並ぶ。焚口はいずれも溝37の反対側、すなわち北側へ向く。竈はいずれも土製で平面形は C 字形であり、幅、奥行きともに 60 cm ~ 1 m、燃焼部径 40 ~ 50 cm である。竈から遺物は出土していない。

5 基の竈はいずれも溝37から約 2 m 離れた地点にあり、先述の通り等間隔に並ぶことから、ほぼ同時期に構築されたものと考えられる。5 基の竈の東、西には溝37から北に伸びる小溝があり、その東、西側には竈は広がらないことから、この小溝に挟まれた東西 26 m、南北 9 m 以上の空間を 4 分割するような区画が存在した可能性が考えられる。これら 5 基の竈周辺では礎石、柱穴はみとめられないものの、この 4 分割される区画からは長屋のような建物の存在が考えられる。

瓦敷竈 (図4-X-2)

3 A 竈 14 (1080) がある。

先述の溝37の南側にあり、溝37から南へ延びる小溝の東側に位置する。

3 A 竈 14 (1080) は焚口を西側へ向け、底部に平瓦を敷く。底部のみの検出である。

流し枡を伴う竈 (図4-X-2)

3 A 竈 15 (1081)、3 A 竈 16 (1082)、3 A 竈 17 (1083) の 3 基がある。

等間隔で並ぶ竈・瓦敷竈

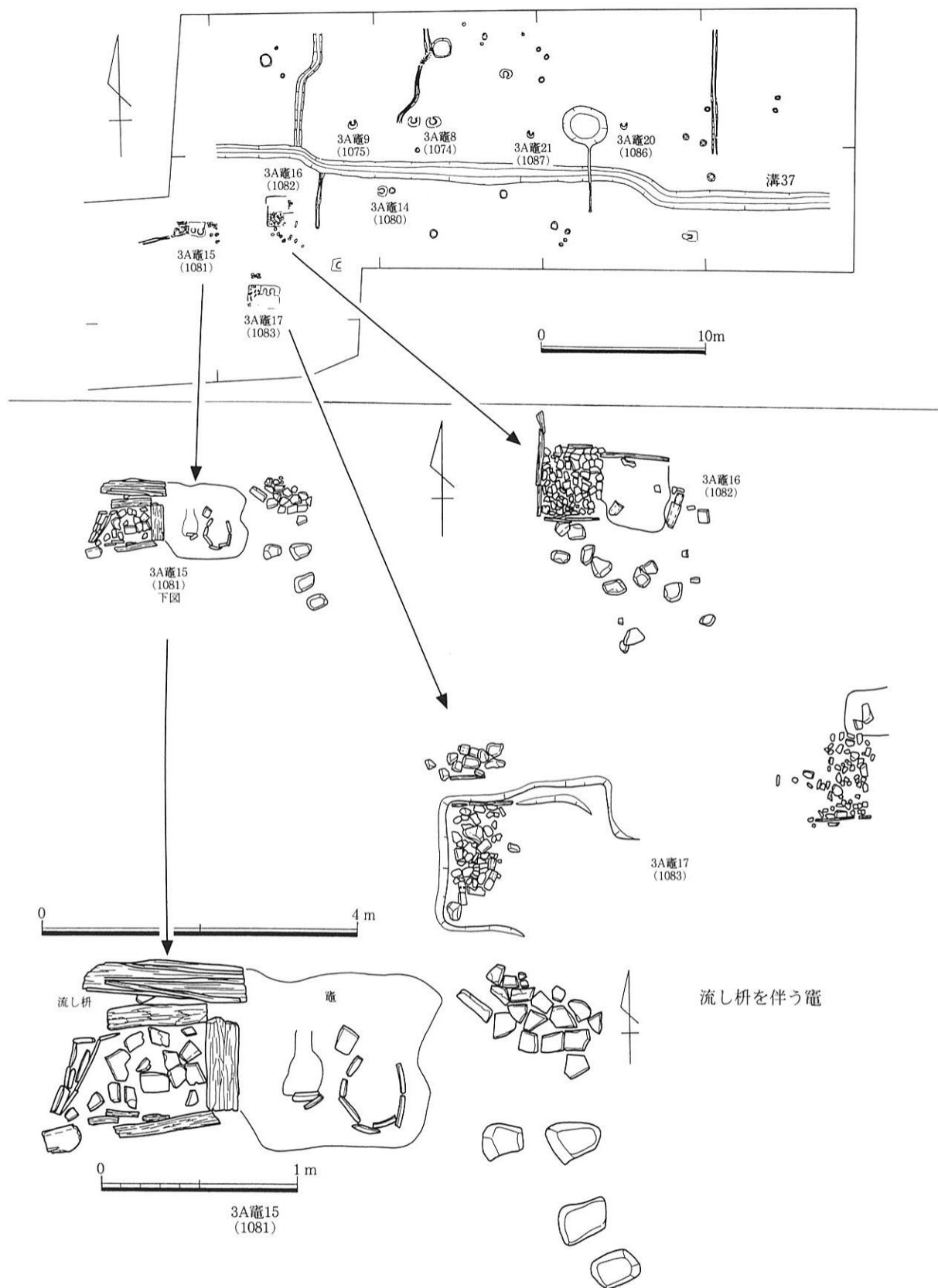


図4-X-2 豊臣前期 等間隔で並ぶ竈・瓦敷竈・流し枡を伴う竈

先述の溝37の南側にあり、溝37から南へ延びる小溝の西側に位置する。

3 A 竈15 (1081) と 3 A 竈16 (1082) は約 4 m 隔てて東西に並び、3 A 竈17 (1083) はこれらの南約 4 m の箇所にある。3 基とも遺構配置状況が共通し、同様の構造をもつものと考えられる。

3 A 竈15 (1081) は残存状況が最も良好である。東に 2 連の竈、西に流し枡があり、竈の範囲は東西 1 m、南北 90 cm、流し枡の範囲は東西 90 cm、南北 90 cm である。竈は焚口を北側へ向け、粘土と瓦で構築される。平面形は C 字形であり、幅 20～30 cm、奥行きともに 40 cm、燃焼部径 20～30 cm である。竈から遺物は出土していない。流し枡は底面が瓦敷き、側面が横板である。南側に東西方向の排水溝があり、排水溝はそのまま西へと延びる。

3 A 竈17 (1083) は焚口を南側へ向け、他の状況は 3 A 竈15 (1081) と類似する。

大型竈 (図 4 - X - 3)

3 A 竈 2 (1068) がある。3 A 屋敷 1、溝33の西側に位置する。

近接して平行する 2 基が検出され、焚口はいずれも南東側へ向く。竈はいずれも土製で平面形は他に比べ奥行きが長い U 字形であり、幅 60 cm、奥行き 1 m、燃焼部径 30～40 cm である。竈からは、漆器椀、箸、膳の板、釘、小柄、小刀が出土する。

一般的な竈 (図 4 - X - 3)

1 A 竈 1 (883)、1 A 竈 2 (884)、1 A 竈 3 (885) の 3 基が比較的残存状態が良好である。3 基は、先述した 1 A 竈 4 (886) が設置される 1 A 調査区屋敷 5 の北側に位置する。

3 基はいずれも直径 30 cm と小規模な竈であり、1 A 竈 1 (883)、1 A 竈 2 (884) は 1 m、1 A 竈 2 (884)、1 A 竈 3 (885) は 3 m の距離で 3 基が密接して検出された。焚口は、1 A 竈 1 (883)、1 A 竈 2 (884) が北、1 A 竈 3 (885) が北西へ向く。竈はいずれも土製で瓦が補強材に使用される。3 基とも平面形は C 字形になると考えられ、幅 60 cm、奥行き 60 cm、燃焼部径 30～40 cm である。燃焼部には炭化物が残る。竈から遺物は出土していない。

2. 三の丸築造以降、大坂夏の陣直前 (豊臣後期) の竈遺構

大型竈 (図 4 - X - 4)

3 A 竈27 (665) がある。3 A 調査区の北西隅に位置する。焚口は南側へ向く。平面形は C 字形で、焚口を除く本体に直径 20～30 cm の石を 8 個円形にめぐらせる。直径 1 m、燃焼部径 50 cm、焚口幅 45 cm である。竈から遺物は出土していない。

3. 大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前 (畑の時期) の竈遺構

等間隔で並ぶ竈 (図 4 - X - 4)

3 A 竈22 (475)、3 A 竈23 (476)、3 A 竈25 (477)、3 A 竈26 (478) の 4 基がほぼ等間隔で検出されている。4 基は 3 A 調査区西中央、畑に挟まれた 3 列の屋敷地群の中央列でほぼ東西方向に並び、3 A 竈22 (475)、3 A 竈23 (476) は 7 m、3 A 竈23 (476)、3 A 竈25 (477) は 9 m、3 A 竈25 (477)、3 A 竈26 (478) は 5 m の距離をもつ。

3 A 竈22 (475) は 2 連で、焚口は南側へ向く。竈は底面の粘土のみが高さ 5 cm 程度残存するのみで

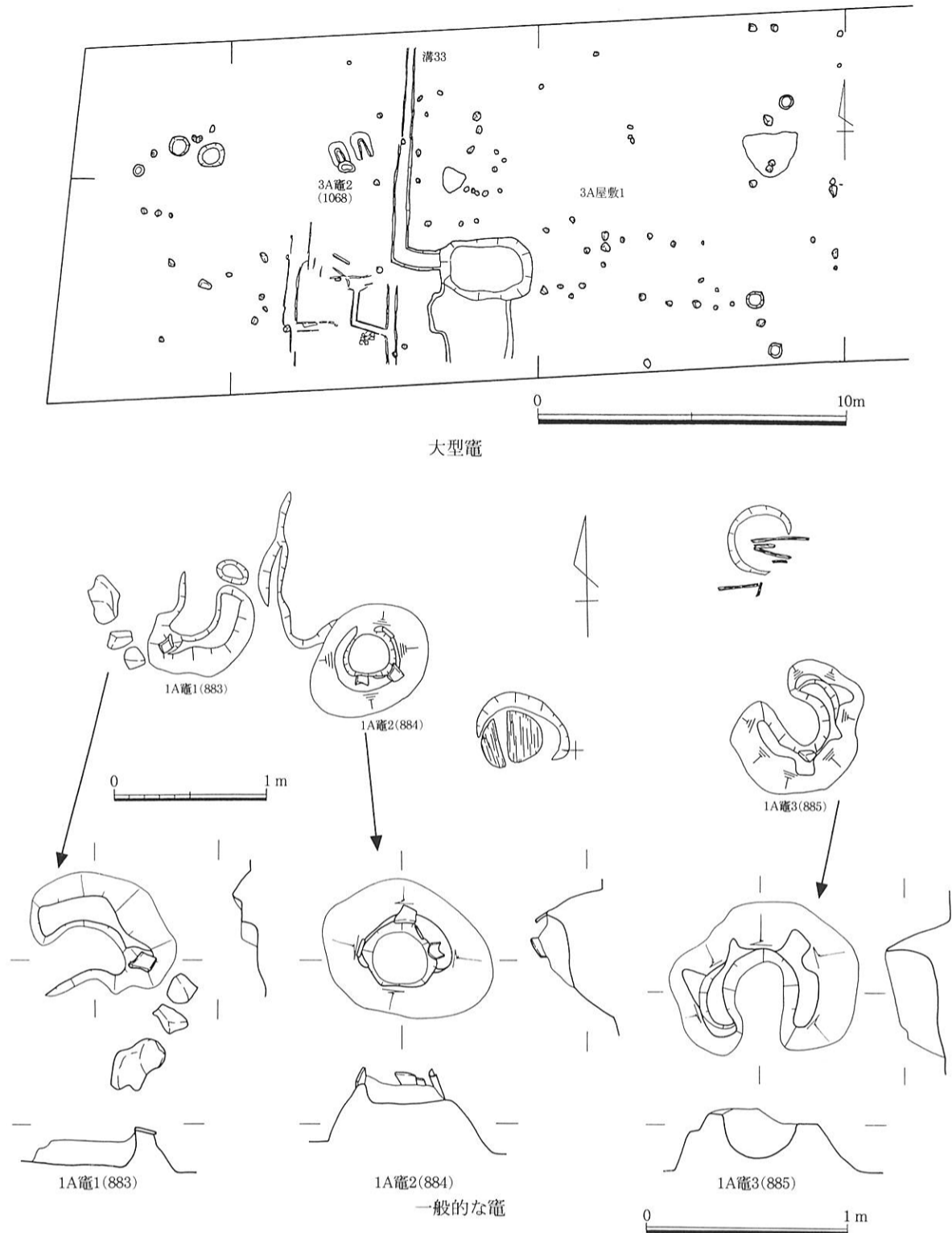


図4-X-3 豊臣前期 大型竈・一般的な竈

ある。平面形はC字形で、燃焼部径は20cmと30cmである。竈から遺物は出土していない。

3 A 竈23 (476) は1連で、焚口は東側へ向く。竈は底面の粘土のみが残存する。残存部は一辺50cmの方形を呈し、中央の燃焼部径は25cmである。竈から遺物は出土していない。

3 A 竈25 (477) は2連で、焚口は東側へ向く。竈は底面の粘土のみが高さ5cm程度残存するのみである。平面形はC字形で、燃焼部径は20cmと30cmである。竈周辺で焼塩壺、羽子板が出土する。

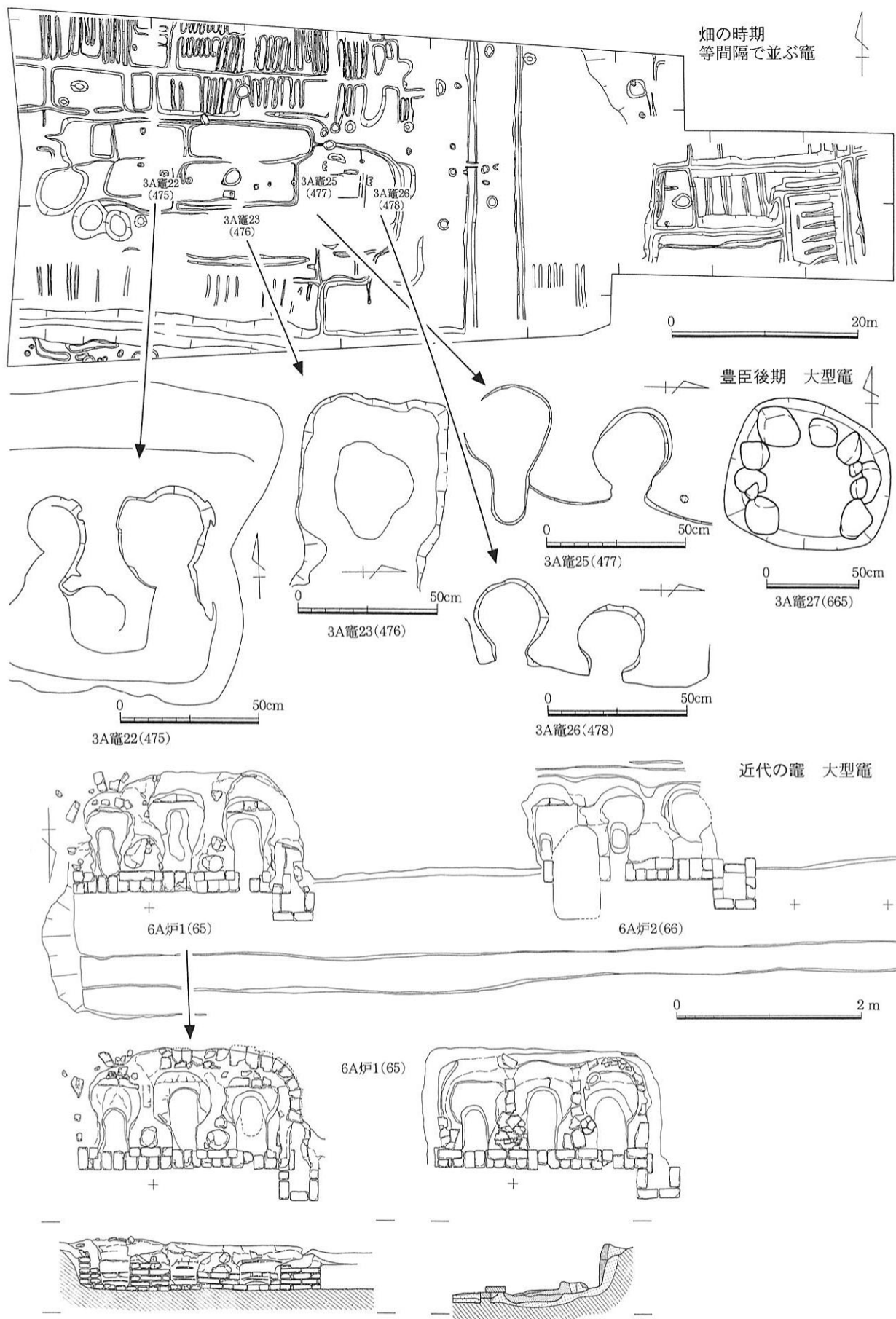


図4-X-4 畑の時期 豊臣後期 近代の竈

3 A 竈26 (478) は3 A 竈25 (477) と類似する。

竈のあり方および周囲をめぐる溝から、屋敷地の基本的な範囲は東西7 m、南北5 m前後とみられる。

4. 徳川氏による大坂城再築後（近代）の竈遺構

大型竈（図4-X-4）

6 A 炉1 (65)、6 A 炉2 (66) がある。6 A 調査区の北西に位置し、2 C 調査区との境に近い。約2 mの間隔で、ほぼ東西方向に2基が並んで検出される。いずれも3連で、焚口は北側へ向く。竈の全体形は直方体で、レンガとそれを覆う粘土で構築される。6 A 炉1 (65)、6 A 炉2 (66) は規格がほぼ同じであり、それぞれ幅2.3m、奥行き1.3m、燃烧部径40cmで残存高50cmである。燃烧部背面の煙道は横方向に貫通し、竈西側で北へ屈曲し、焚口横に煙出口がある。これら煙道部および煙出口に、炭化物は付着しない。焚口の前面は3基を連結するかたちで通路状になっており、その幅は90cm～1.3m、長さ8 m以上でレンガ敷きである。竈から遺物は出土していない。

周辺遺構からは「SHINAGAWA」の刻印をもつレンガが出土しているが、本竈を構築するレンガは無文であり、「SHINAGAWA」の刻印をもつレンガは含まれない。¹⁾

本竈は当初舎密局に伴うものかと考えたが、舎密局建物図面のなかでみられる竈とは場所が異なり、本竈の場所は空閑地となっており該当する施設はみられない。²⁾

舎密局は明治2 (1869) 年の開設後、理学校、大坂開成所などつぎつぎと組織、名称が変遷し、明治19 (1886) 年に第3 高等学校となり、明治22 (1889) 年には京都に移転し、旧制第3 高等学校となる。京都への移転にいたるまで、名称の変更とともに建物の増改築がなされ、幾枚かの図面が残存しているが、これらをみても本竈に該当する施設はみられない。また、明治31年から大正11年にはこの地に陸軍幼年学校があり、これに関する図面においても本竈に該当する施設はみられない。³⁾

出土遺物もなく年代の確証は得られないが、陸軍幼年学校の後、この地には軍の施設が設けられており、これについての詳細は不明であるが、本竈はこの軍の施設に伴う可能性が大きいと考えられる。

5. 周辺の大坂城調査における竈

今回の調査後、大阪府警察本部新庁舎建設工事に伴う発掘調査が近隣でなされ、豊臣期の竈が検出されている（図4-X-5-1⁴⁾）。豊臣-3面では竈685が、豊臣-1面では4連の竈527、5連の竈533が検出され、他に豊臣-2面においても竈が検出されている。竈533は2回以上の作り替えがみられ、竈の開口部に木組みがみられることから何らかの施設の存在が想定されている。

屋敷に伴う竈は、府立大手前高校における発掘調査において検出されている（図4-X-5-2⁵⁾）。三の丸下層の城下町下面で検出された建物13と建物14の間に竈が1基、また、これと道路を挟んで対峙する建物12に伴う竈が1基検出されている。道路に面する側を建物の表とみると、竈は2基ともに、建物の裏手にあたる箇所位置している。3 A 屋敷2に伴う3 A 竈3 (1069)、3 A 竈6 (1072)、3 A 竈7 (1073) も屋敷2の北側を東西にはしる溝36を道路側溝とみると建物の裏手にあたり、屋敷内における竈の位置に共通点がみられる。

惣構北西隅では、大坂夏の陣以前の豊臣政権の大名クラスとみられる武家屋敷が検出され、屋敷内では9棟の建物が調査されている。⁶⁾うち建物1の土間中央には焚口を10～11もつ湾曲する多連竈が検出されている（図4-X-5-3）。3 A 竈6 (1072) は3連、3 A 竈7 (1073) は背面を共用する東側5連、

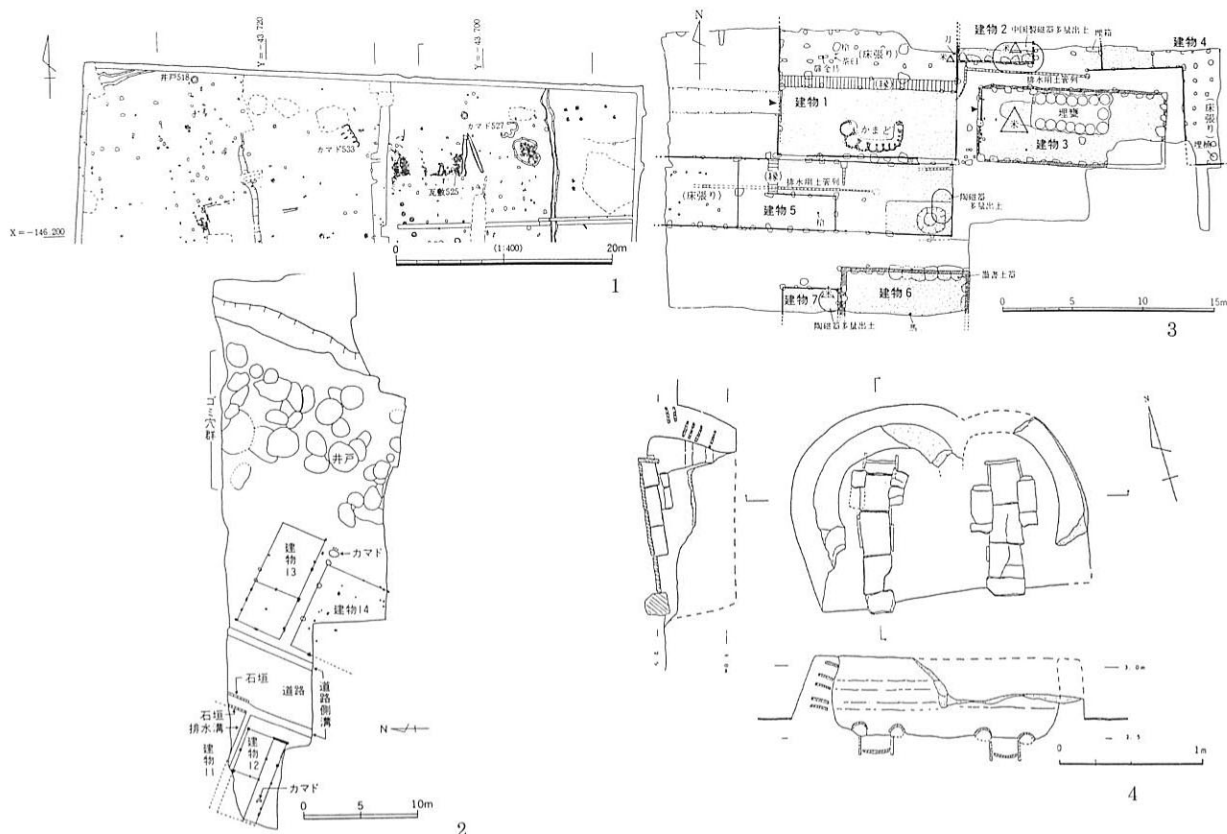


図4-X-5 周辺の大坂城跡調査における竈

西側2連の多連竈であり、多連竈にも3 A竈6 (1072) は3連、3 A竈7 (1073) のように直線に並ぶもの、建物1中央の竈のように弧を描く曲線に並ぶものなど多様な形態がみられるようである。

上記以外では、豊臣期前半の惣構内の町屋に伴う竈 (OS85-28次)⁷⁾、三の丸築造以前の残存状況が良好な竈 (OS88-56次)⁸⁾ (図4-X-5-4) があげられる。後者は、東西約2m、南北1.4mの2連の竈で、焚口から燃焼部にかけて底面および側面に平瓦を敷き並べ、側面の平瓦の上には丸瓦をのせ、焚口前面には石を据える。竈に関連する遺構は検出されておらず、竈が何に用いられたものかは不明である。3 A竈2 (1068) と類似する遺構である。

6. 大坂城の竈の整理と注意点

大坂城に関わる豊臣期～徳川初期の竈については鈴木秀典氏がまとめられている⁹⁾。そのなかで氏は竈を焚口が一つのものとは複数のものに分けられ、前者を長方形と鍵穴形のものに細分されている。これにならって、今回の資料を含めた大坂城の竈をみてみたい。

焚口が一つで長方形のものは、豊臣前期の大型竈である3 A竈2 (1068) がある。これは幅60cm、奥行き1mであり、直径50cm前後の資料が大半を占める今回の資料のなかでは大型の竈である。鈴木氏は長方形の竈が鍵穴形より多いとされるが、今回の資料では確実に長方形の竈は3 A竈2 (1068) のみであり、焚口が一つの竈は、これ以外ほとんどが鍵穴形である。長方形の竈と鍵穴形の竈の比率は、今後大坂城周辺の竈遺構をみるにあたり注意すべき点のひとつである。このような長方形の竈は、先述したOS88-56次の竈 (図4-X-5-4) のほか江戸時代の遺構として、伊丹郷町で酒造用の大型竈 (図4-X-6-42) として、住友銅吹所跡では銅精錬関係遺構 (図4-X-6-41) として検出されており、いずれも石を用いた大型の竈である。この2例をみると、長方形の大型竈は生産関連の竈とも考えられ

るが、類例が少なく今後の資料の蓄積をまって判断したい。

焚口が一つで鍵穴形のものは、先述したとおり今回の資料の大半がこれに属する。粘土のみで構築されるものが多いが、3 A 竈15 (1081) のように燃焼部の壁に瓦を貼り付けるものや3 A 竈27 (665) のように石をめぐるものがあり、前者は平野環濠都市遺跡で検出された竈 (図4-X-6-35) に類似する。また、3 A 竈14 (1080) は底面のみの検出であるが、底面に瓦片を敷くことが確認されている。他に1 A 竈4 (886) は前面に瓦片を敷く。これらの竈は上部が削平された状態で検出されるものが大半であり、竈の上部構造を知ることは困難であるが、図4-X-3 下段に示した断面図に明らかなように燃焼部の壁はわずかに内湾しながらたちあがっており、絵巻物資料¹⁰⁾にみられるようなドーム形になるとみられる。

焚口が一つの鍵穴形の竈が2基並んで検出される例は3 A 竈15 (1081) (図4-X-2)、3 A 竈2 (1068) (図4-X-3)、3 A 竈22・25・26 (475・477・478) (図4-X-4) など多くみられる。一方、複数の焚口をもつ多連竈は、3 A 竈6 (1072) や3 A 竈7 (1073) (図4-X-1)、大阪府警察本部新庁舎建設工事に伴う発掘調査において検出された竈527、竈533、建物1の土間中央に据えられた多連竈があるものの、鈴木氏が指摘されるように数少ない遺構しか検出されていない。数少ない遺構ながら、多連竈は屋敷に伴って検出される例が大半であり、多人数の煮炊きをまかなった竈とみられる。奈良県今井町に残る江戸時代民家を見ると、豊田家 (1662年) でやや弧状に並ぶ5連の竈が、河合家 (18世紀後半) では直線に並ぶ3連の竈が造られており、旧米谷家 (18世紀中頃) では直線に並ぶ5連の竈が復元されている。旧米谷家の竈には大羽釜、大鍋、羽釜、羽釜小、小鍋と大きな煮沸具から小さな煮沸具へと順に並べられていたようである。¹¹⁾ 3 A 竈7 (1073) や建物1に伴う多連竈も、燃焼部直径の大きな竈から小さな竈へと並んでおり、多連竈の基本形は豊臣前期以来のものである可能性が考えられる。しかしこの点についても、資料数が少なく、豊臣前期以前にさかのぼる可能性もあり、今後の資料の蓄積をまって判断していくべきであろう。

他に注目すべき点として、流し枡を伴う竈と等間隔で並ぶ竈があげられる。

3 A 竈15 (1081)、3 A 竈16 (1082)、3 A 竈17 (1083) は豊臣前期の流し枡を伴う竈として貴重な資料である。流し場の遺構は、瓦や石を組み、排水用の土管列をつなげた徳川初期のものは検出されているが、これには竈が伴わず台所に伴うものか否かは不明である。鈴木氏が大坂城周辺の竈を検討された1989年には、註6) の文献で記されているように豊臣期の流し場遺構は検出されておらず、3 A 竈15 (1081)、3 A 竈16 (1082)、3 A 竈17 (1083) は竈に流し枡が伴う例として大坂城周辺では初現になる可能性がある。

3 A 竈15 (1081)、3 A 竈16 (1082)、3 A 竈17 (1083) は近接しており、長屋のような小規模な宅地が密集していた可能性がある。これは等間隔で並ぶ豊臣前期でも新しい段階に位置づけられる3 A 竈8 (1074)、3 A 竈9 (1075)、3 A 竈20 (1086)、3 A 竈21 (1087)、畑の時期とされる大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前に位置づけられる3 A 竈22 (475)、3 A 竈23 (476)、3 A 竈25 (477)、3 A 竈26 (478) にみられるように、長屋の各戸に作り付けられた竈とみられる。3 A 竈15 (1081)、3 A 竈16 (1082)、3 A 竈17 (1083) はその基盤層が溝37を埋めており、3 A 竈8 (1074)、3 A 竈9 (1075)、3 A 竈20 (1086)、3 A 竈21 (1087) が溝37から一定の間隔をおきこれに平行して構築されていることを考えると、3 A 竈8 (1074)、3 A 竈9 (1075)、3 A 竈20 (1086)、3 A 竈21 (1087) → 3 A 竈15 (1081)、3 A 竈16 (1082)、3 A 竈17 (1083) となる可能性がある。これに3 A 竈22 (475)、3 A 竈23

(476)、3 A 竈25 (477)、3 A 竈26 (478) が後続することをみると、当初こうした長屋作り付け竈は各戸に1基であったのが、豊臣前期でも新しい段階では各戸に2基並列する竈が主体になった可能性がある。

今回の調査における資料のみでの変遷であり、普遍的にみられる事象であるか否かは周辺の資料をあたらないと判断できないが、長屋の各戸に作り付けられた竈は豊臣前期でも新しい段階からみられ、当初1基であったものが豊臣前期の最末期および大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前の段階では2基並列ものが主体となる点が今回の資料では指摘できる。

7. 中世～近世竈の素描

大坂城に関わる竈は中世末～近世初頭に位置づけられ、このころの竈の様相の一端を示すことができたと考える。つぎに、大坂城の竈が中世～近世の竈のなかではどのような位置を占めるのかを考えるため、中世～近世の竈の素描をこころみたい。近年、城郭を中心とする中世～近世の遺跡の発掘件数は夥しく、すべてを網羅する力量はもち得ないため、中世末～近世の集落が集成された資料から竈資料を抽出し、これにいくつかの資料を追加したものを基とした。また、近世の竈については、山上雅弘氏の研究¹³⁾を参考にさせていただいた。

今回集成した中世～近世竈は表4-X-2に示したとおり52例を数え、青森から鹿児島にいたる地方で13世紀から19世紀の竈がみられる。これらのうち実測図、写真の明瞭なものを地方別、年代別に並べたものが図4-X-6である。この表4-X-2、図4-X-6からいくつか気づいた点を述べてみたい。

まず、もっとも年代がさかのぼる資料として13世紀の大阪府大庭寺遺跡、大阪府陶器南遺跡、大阪府上町東遺跡、神奈川県佐助ヶ谷遺跡の4資料があげられる。大阪府大庭寺遺跡、大阪府陶器南遺跡では掘立柱建物の一画を占める土間に粘土で馬蹄形の竈が作り付けられる。一方、神奈川県佐助ヶ谷遺跡では建物の一画に一部石組みを用いた竈が作り付けられる。平安時代後期から鎌倉時代を中心とする絵巻物資料にはドーム形の竈が描かれ、考古資料ではこの4例が年代的に近い資料となる。絵巻物資料をみると、一遍聖絵や慕婦絵詞では風呂用の竈が、法然上人絵伝では茶所とみられる場所の竈が、信貴山縁起では製油のためえごまを焙っているとみられる竈が、慕婦絵詞では多人数の煮炊きをまかなう台所の調理用竈が描かれている。いずれも人物の大きさと比較すると直径あるいは長辺が1～3mの大型のものであり、庶民の各戸の煮炊きに伴うものではなさそうである。大阪府大庭寺遺跡、神奈川県佐助ヶ谷遺跡は焚口の幅が約3mであり、これらの竈も庶民の各戸の煮炊きに伴うものではなく、絵巻物資料でみられるような用途に用いられた可能性が考えられる。

鎌倉の庶民の住まいとみられる遺構では、囲炉裏は検出されるが竈の検出例は皆無である¹⁵⁾。西日本においても網羅的に探索したわけではないが、大阪府の3例以外明確な竈はみられない¹⁶⁾。13～15世紀の竈遺構は稀少であり、とくに庶民の生活に伴うとみられる小型の竈は皆無に近い。これは、風呂や製油、多人数の煮炊きをまかなう場面では大型竈がみられるものの、一般的な煮炊きの場面の多くには囲炉裏がみられる絵巻物資料のあり方と整合性をもつといえる。

16世紀にはいと、竈資料は多彩となる。竈の多くは城や城下町、環濠都市でみられる。竈はこうした一般集落とは異なる都市部を中心とした地域で主に用いられたとも考えられるが、調査の対象となる遺跡が上記の性格をもつものにおのずと限られているためとも考えられ、16世紀に竈が都市部で主に用

表 4 - X - 2 中世～近世の竈一覧

NO.	府県名	遺跡名	遺跡の性格	遺構名	遺構の性格	年代
1	青森	根城跡本丸	城館	カマド状遺構 2 基	竈	15世紀前半～17世紀初頭
2	青森	根城跡東構	城館	カマド状遺構 10 基	竈	15世紀前半～17世紀初頭
3	岩手	栗田I・II遺跡	集落?	竈状の焼土遺構		16世紀末～17世紀前半
4	岩手	江刺家遺跡	集落	HII-2掘立柱建物跡カマド	掘立柱建物に伴う竈	18世紀
5	福島	本町遺跡	集落	竈	竈	16～19世紀
6	茨城	下新地A遺跡	集落	竈	竈	17世紀
7	茨城	沢田遺跡	製塩跡	竈・竈状遺構	製塩に関わる竈	17～18世紀
8	群馬	大胡城跡 (三ノ曲輪)	曲輪	竈	石組竈	
9	群馬	大友館跡	居館	カマド	掘立柱建物に伴う竈	15～16世紀
10	神奈川	千葉地遺跡	屋敷?	炉状址II	竈?	14世紀後半以降
11	神奈川	佐助ヶ谷遺跡		建物 8 カマド	建物に伴う竈	鎌倉要調べ
12	神奈川	南金目堀の内館遺跡	居館	焼土混じり粘土	竈?	16世紀後半
13	神奈川	西ノ谷遺跡	名主屋敷	竈	竈	江戸時代
14	長野	小坂城	山城	(礎石間の) 石組のカマド	竈	室町時代末期～戦国時代末期
15	長野	山崎遺跡	城	かまど状の石組遺構	竈	16世紀
16	新潟	高田城	城	竈	礎石建物に伴う竈	17世紀中葉
17	愛知	清洲城下町遺跡	城下町	竈状遺構 (SX4006)	竈 (煮炊きまたは風呂?)	19世紀
18	愛知	井田城跡	本丸	かまど跡	竈	15世紀後半～16世紀中頃
19	岐阜	岐阜城跡	城館	SX05・18	竈	16世紀
20	福井	一乗谷朝倉氏遺跡	城下町	SX32	石組竈	16世紀
21	福井	一乗谷朝倉氏遺跡	城下町	SX344	礎石建物に伴う石組竈	16世紀
22	福井	一乗谷朝倉氏遺跡	城下町	SX240	石組竈	16世紀
23	福井	一乗谷朝倉氏遺跡	城下町	SX709・710	礎石建物に伴う石組竈	16世紀
24	福井	一乗谷朝倉氏遺跡	城下町	SX3831	石組竈	16世紀
25	滋賀	大津城跡	城		礎石建物に伴う竈	1586年～1600年
26	滋賀	妙楽寺遺跡		SX467・479	石組竈	室町時代後半
27	京都	平安京左京四条三坊十三町		SX-534	竈	室町時代後葉(?)
28	京都	京都(中京)1987年度調査	町屋		竈	16世紀以降
29	京都	京都(下京A)1981年度調査	町屋		竈	16世紀以降
30	京都	六角堂境内	寺院		竈	桃山時代～江戸時代前期
31	京都	伏見城跡	城	礎石建物跡SB003竈SX169	礎石建物に伴う竈	1594年～1623年
32	大阪	大庭寺遺跡	集落	B329-OX	掘立柱建物に伴う竈	13世紀
33	大阪	陶器南遺跡	集落		掘立柱建物に伴う竈	13世紀
34	大阪	上町東遺跡	集落		竈	13世紀
35	大阪	平野環濠都市遺跡	都市	かまど701		16世紀中葉～後葉
36	大阪	堺環濠都市遺跡	都市	SC01	竈 (2 連)	16世紀後半
37	大阪	堺環濠都市遺跡	都市	SB09	礎石建物に伴う竈	16世紀後半
38	大阪	堺環濠都市遺跡	都市		竈	16世紀後半
39	大阪	茶臼山古墳	家康の本陣	瓦と石を組み合わせた竈	本陣の台所	17世紀初頭
40	大阪	玉造小学校	町屋	竈状遺構	酒造用の竈?	18世紀中頃
41	大阪	住友銅吹所跡	銅精錬所	かまど401～412・301～302・201～205	銅造のための湯沸かし・炊飯	17～19世紀
42	兵庫	伊丹郷町	町屋	第27次調査SX01など	酒造用の竈	19世紀
43	兵庫	御着城跡	城内の居屋敷	「くど」状遺構		16世紀
44	兵庫	豊岡藩庁跡	城下町		3 連竈 (石組み)	1580～1590年代
45	兵庫	明石城武家屋敷跡	城下町	SK2002	五右衛門風呂の焚口?	要調べ
46	広島	北谷山城跡	山城	第2郭第1号かまど跡	竈	16世紀要調べ
47	広島	北谷山城跡	山城	第3郭第2号かまど跡	建物に伴う竈	16世紀要調べ
48	佐賀	羽柴秀保陣跡	城	第二郭礎敷遺構	竈?	16世紀末
49	大分	守岡遺跡	城		竈	16世紀
50	鹿児島	苦辛城跡	山城	建物19竈	掘立柱建物に伴う竈	14～16世紀
51	鹿児島	上加世田遺跡	鉄器生産工房跡		竈 (鉄器生産関連)	16世紀
52	鹿児島	西ノ平遺跡	屋敷		竈	18世紀

いられたものか否かはわからない。

今回集成した16世紀の資料では、大坂城でみられた長屋に伴うとみられる等間隔で並ぶ小型の竈が他所ではみられず、長屋に伴うとみられる等間隔で並ぶ小型の竈は大坂城を初源とする可能性が考えられ、大坂城では少なくとも16世紀後葉のこの時期に成立した可能性が大きい。

16世紀以降の竈をみると、石組みのものが多く、大きさは直径50cm～1mの竈が大半である。集成した資料においても、大坂城の竈でみられたように、焚口が一つのものと複数のもの、また形態では長方形と鍵穴形のものがそろってみられ、基本的に同じ形態のものが19世紀まで用いられるようである。

今回集成した18～19世紀の竈は、酒造用や鋳造用の湯沸かし、風呂に用いられるものなど生産に関わるものが多く、炊飯用とみられる竈は東日本の西ノ谷遺跡 (図4-X-6-13)、江刺家遺跡 (図4-X

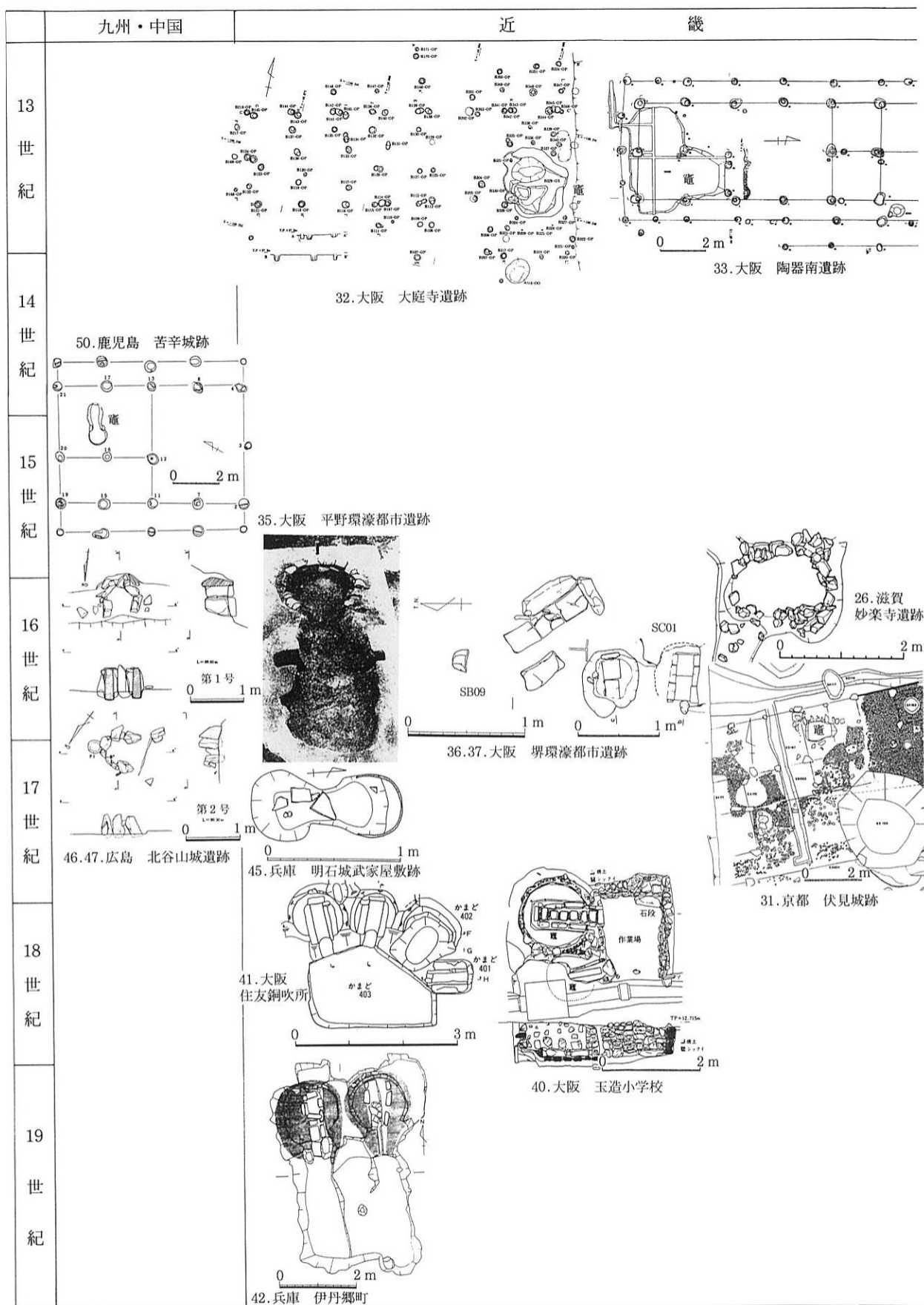
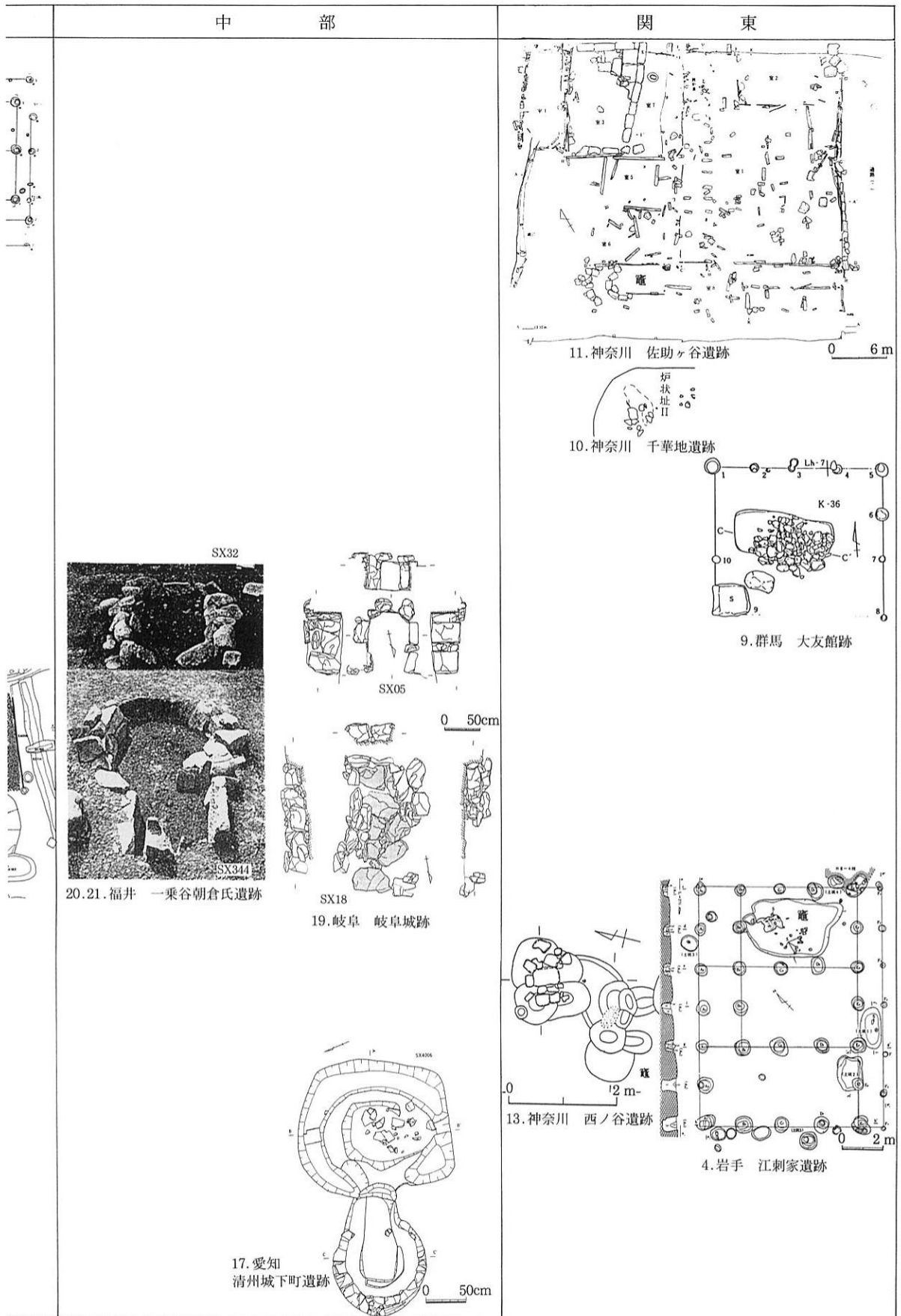


図4-X-6 中世～近世の竈（大坂城の竈は除く）



ー6-4) など少数例に限られた。西日本では、炊飯用の竈は今井町の民家に据えられた例などからその存在は明らかであるが、遺構として検出される例は少なく、近世、竈は西日本に普遍的であるとする見解を考古学的に遺構から認証することは困難である。

中世～近世の竈は、以上のような変遷を示すものであり、このなかで大坂城の竈は、全国的に城や都市で石組みを中心とした多様な竈がみられるようになる16世紀後葉に時期を同じくして多様な竈がみられ、全国的にみても最も多様性に富む竈がみられる。とくに、長屋に伴うとみられる等間隔で並ぶ小型の竈は大坂城を初源とする可能性が考えられ、注目される。

おわりに

今回の調査で検出された竈を整理し、周辺の調査例とともに、大坂城の竈の中世～近世の竈のなかでの位置づけを考えてみた。中世以降、竈遺構が全国的にみられるようになる16世紀に、大坂城では最も多様な竈がみられるようであり、今回おこなった竈の整理も基本的な資料として今後活用されれば幸いである。

最後になりましたが、江浦 洋氏、小林和美氏、山上雅弘氏には有益なご教示をいただきましたことをここに記し、感謝申し上げます。

註

- 1) 遺物の探索には江浦 洋氏、小林和美氏にご協力いただき、江浦 洋氏には次の文献をご教示いただいた。
上野恵司 2000 「近代煉瓦」『季刊考古学』第72号
- 2) 本書「Ⅻ 舎密局関連遺構について」を参照されたい。
- 3) 小林和美氏にご教示いただいた。本書「ⅩⅢ 大阪陸軍幼年学校について」を参照されたい。
- 4) 財大阪府文化財調査研究センター 2000 『難波宮跡北西の調査－大阪府警察本部新庁舎建設工事に伴う大坂城(その6)発掘調査速報－』
- 5) 佐久間貴士編 1989 『よみがえる中世2－本願寺から天下一へ 大坂』平凡社
- 6) 佐久間貴士編 1989 『よみがえる中世2－本願寺から天下一へ 大坂』平凡社
鈴木秀典 1987 「発掘された豊臣期大名屋敷」『草火』11号財大阪府文化財協会
- 7) 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会編 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
- 8) 伊藤 純 1989 「大坂夏の陣の証人 備前焼の大甕」『草火』11号財大阪府文化財協会
第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会編 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
- 9) 鈴木秀典 1989 「竈と炉」『よみがえる中世2－本願寺から天下一へ 大坂』平凡社
- 10) 信貴山縁起、一遍聖絵、福富草紙など。澁澤敬三 神奈川大学日本常民文化研究所 1984 『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』平凡社
- 11) 林 清三郎 1984 「今井町重要文化財民家八件の修理」『月刊文化財』No.245
- 12) 註7) 文献
- 13) 山上雅弘 1991 「竈について」『第3回 関西近世考古学研究会大会 近世都市の構造 発表要旨』関西近世考古学研究会
- 14) 註10) 文献
- 15) 馬淵和雄 1989 「鎌倉の煮炊き－囲炉裏と鍋－」『よみがえる中世3－武士の都 鎌倉』平凡社
- 16) 山田隆一氏が引用文献33で指摘するように、焼土、炭化物を明瞭に伴わないため積極的に竈とする証左には欠けるが、類似する遺構には竈の可能性が考えられる遺構がある。
浅尾 悟 1990 「土坑を伴う中世掘立柱建物について」『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅵ』三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター
伊藤裕偉 1994 「伊勢市朝熊町 杉葉崎遺跡の調査」『三重県埋蔵文化財センター 研究紀要』第3号

表 4-X-2 中世～近世の竈一覧引用文献

1. 2. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
3. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
4. 財岩手県埋蔵文化財センター 1984 『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第70集 江刺家遺跡発掘調査報告書』
5. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
6. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
7. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
8. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
9. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
10. 千葉地遺跡発掘調査団 1982 『神奈川県鎌倉市 千葉地遺跡』
11. 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団 1993 『神奈川県鎌倉市 佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書』
12. 平塚市教育委員会 1989 『平塚市埋蔵文化財シリーズ第13集 諏訪前B・大縄橋遺跡他』
13. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
14. 東海埋蔵文化財研究会 1988 『清須一織豊期の城と都市―資料編』
15. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
16. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
17. 財愛知県埋蔵文化財センター 1995 『清洲城下町遺跡Ⅴ』
18. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
19. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
20. 福井県教育委員会 1976 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ―朝倉館跡の調査―』
21. 福井県教育委員会 1988 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ』
22. 福井県教育委員会 1973 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡Ⅴ』
23. 福井県教育委員会 1977 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡Ⅷ』
24. 福井県教育委員会 1989 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 平成元年度発掘調査環境整備事業概要(21)』
25. ジャパン通信社 1997 『月刊文化財発掘出土情報 3月』
26. 滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1989 『妙楽寺遺跡Ⅲ』
27. 財古代学協会 1984 『平安京左京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡一』
28. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
29. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
30. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
31. 財京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991 『京都府遺跡調査概報第44冊』
32. 財大阪府埋蔵文化財協会 1989 『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第41輯 陶邑・大庭寺遺跡』
33. 大阪府教育委員会 1997 『陶器南遺跡発掘調査概要・Ⅲ』
34. 泉佐野市教育委員会 1995 『上町東遺跡―94―3区の調査―』
35. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
36. 堺市教育委員会 1990 『堺市文化財調査報告第34集』
37. 堺市教育委員会 1990 『堺市文化財調査報告第49集』
38. 堺市教育委員会 1984 『堺市文化財調査報告第20集』
39. 趙 哲済 1986 「「茶臼山古墳」の発掘調査」『葦火』4号(財)大阪市文化財協会
40. 松尾信裕 1987 「玉造小学校で発見された酒造遺構」『葦火』9号(財)大阪市文化財協会
41. 財大阪市文化財協会 1998 『住友銅吹所跡発掘調査報告』
42. 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1992 『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ』
43. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
44. ジャパン通信社 1997 『月刊文化財発掘出土情報 6月』
45. 兵庫県教育委員会 1992 『明石城武家屋敷跡』
46. 47. 広島市教育委員会 1986 『広島市の文化財第34集 北谷山城跡発掘調査報告』
48. 佐賀県教育委員会 1983 『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡2』
49. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
50. 鹿児島県教育委員会 1983 『苦辛城跡』
51. 52. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』

